

尾竹竹坡

《銀河宇宙》 《流星》



尾竹竹坡(1878-1936)
《銀河宇宙》

1920年
絹本彩色・軸装
123.5×40.5cm
平成27年度購入



《流星》

1920年
絹本彩色・軸装
123.5×40.5cm
平成27年度購入

昨

年度、尾竹竹坡（一八七八―一九三六）の作品七点がコレクションに加われました。掲載図版はそのうちの二点で、他は《風精》《火精》《宝の番人》《天下廻り持》《失題》です。一種「キテレツ」な印象を与えるこれらの日本画作品は、一九二〇年十月に開催された「尾竹竹坡八火社併合絵画展覧会（第一回八火社展）」の出品作であることがわかっています（ただし、《失題》だけはまた照合できていません）。

八火社とは、一九一九年に竹坡が門人たちと設立した団体です。メンバーのうち、現在も名前が知られているのは竹坡くらいですが、この団体は日本美術史においては未来派との関わりで注目されてきました。洋画家の普門暁が立ち上げた

未来派美術協会に竹坡の門人が混ざっていたり、竹坡自身がその第三回展（三科インデペンデントと改称）に出品していたり、ちょうど来日していたロシア未来派の画家ダヴィト・ブルリュークとヴィクトール・パリモフが八火社第一回展に招かれて揮毫したりと、双方の接点を示すエピソードには事欠きません。

未来派といえは、一九〇九年にフィリップ・マリネッティが発表した「未来派宣言」中の、「咆哮する自動車は、《サモトラケのニケ》よりも美しい」のフレーズが有名です。物や光の軌跡を描いてスピードや運動を表現したことが未来派の新しいさでし

た。それをふまえ、そしてやや鼠目に見れば、竹坡はだいぶ未来派に近づこうとしているように思えます。たとえば《流星》。『帝国絵画商報』九卷十一号（一九二〇年十一月十五日刊）の記事によれば、この作品は「天界にある女性が人間界にある男性の引力に引付けられて墮落する情態」を描いたものだそうです。とすれば、女性《流星》は七人なのではなく実はコマ送りで、竹坡はそれによって女性が堕ちてきた動きの軌跡を表現したと理解できます。さらに、円弧とぼかしを用いた光の表現にも、未来派のさまざまな作例からの影響をうかがってよいでしょう。

とはいえ、やはりそれ以上に注目したいのは、竹坡と未来派の間にある距離の方です。なんといっても竹坡の作品では、未来派とはまったく関係のない種々雑多な要素が、画面をより一層面白く、魅力的にしているのですから。

竹坡は第一回八火社展に五十九点もの作品を出品しましたが、これまで現存が確認されていたのは、《月の潤ひ》《太陽の熱》《星の冷へ》（いずれも宮城県美術館蔵）の三点のみでした。このたびさらに七点が出現したことにより、私たちはようやく、大正期新興美術運動の一角で竹坡がなにを实践していたのか、検討できる地点に立ったのです。

（美術課主任研究員 鶴見香織）